

人々のアフリカのイメージは、どうしても野生動物、砂漠、マサイ、貧困、戦争であることを私は批判するべきではないと思う。私も実際に行く前は確かに、野生動物はすぐそこにいてアフリカ人なら誰でも身近に感じていると思っていたし、赤い衣装のマサイ族がダンスを見せてくれるのは、ありふれた光景であると信じていた。それらもアフリカのイメージの一つで間違いないと思う。実際テレビで見るアフリカの映像はそういったイメージを持つように作られているように思う。

しかし、アフリカを取り巻く状況は日々変化しており、いつまでも野生動物がサバンナを駆け巡り、..というだけではなくなってきた。環境問題も、「自然溢れる大地」、「手付かずの自然」などと称されるアフリカの大地であっても例外なく進行していることは明らかであり、問題はその認識が先進国に比べ甘いこと、遅れていることだ。

アフリカの人口の70%が農業人口とも言われる巨大農業大陸にあって、灌漑農業が行われているのはたった4%で、その残りは雨任せの天水農業である。環境と農業の関係は密接で、環境が守られないことには人々が生きていけないということは明らかなことだ。

驚くことではあるが、アフリカ諸国で農作物の自給自足をしているのは、たった3カ国しかない。ほとんどの国で農作物は輸入されているという事実。

アフリカの大自然も、都市の発展と共に、環境問題として深刻な被害を被り始めている。私のいたケニアをとっても、首都ナイロビの発展と共にその近代生活を支えるために、先進国と同じような問題が起こっている。そして深刻なのは、それに対する対策が立ち遅れており、ほぼ

野放しとなっているということだ。

中でも、森林破壊の問題は深刻である。ケニアでは料理用の燃料として薪を使うが、農村では主に落ちていた木々を拾ってきている。都市部では、木炭を使うことが多い。この木炭を作るのに森林の伐採が行われる。

日本でも有名なマータイ博士は、「グリーンベルト」と称して、植林活動を昔からしているが、「使った分を植える」という発想も、なかなか余裕がなければ生まれない。彼女は、その苗を寄付しているからこそ支持されているのだと思う。ケニアには国立公園となっている森林が多くあるが、その規模も徐々に縮小しているという。ほかにも、サファリなどで観光客に開かれている国立公園に近隣の生活排水が流れこんでいて生態系に影響しているといったことも聞かれる。

また大気汚染も重要な問題だ。ケニアでは、日本の中古車が数多く走っているが、ディーゼル車が多く、黒い煙を吐き散らかして走っていることも見かける。日本ではエコブームで、環境に優しい商品や生活を心がけようといったことがあるが、地球の違うところでは、日本製の車や機械が環境に配慮することなく使われているといったこともある。

昔から変わらない生活をする私のもう一つの実家となったケニアの小さな農村「キアカンジャ」の風景を紹介します。ケニアのナイロビから車で2時間、ニエリという都市からさらに車で30分ほど北上したところにある、今でも伝統的な暮らしをしている農耕民族キクユ族の生活風景です。この自然がいつまでも続



ケニアの青空



バナナの木



アバディア国立公園を望む



ナイロビへと続く道

くことを祈りながら。。。